

平成 30 年度各種調査結果を活用した学力保障の取組事例

事務所名	県南	学校名	一関市立南小学校	TEL	0191-23-3218
------	----	-----	----------	-----	--------------

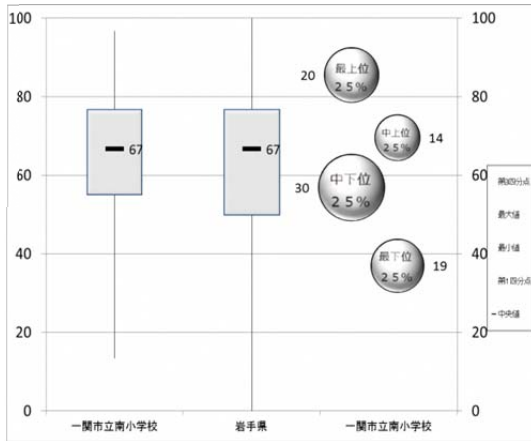
中下位層・下位層を視点にした授業の改善

1 実態把握



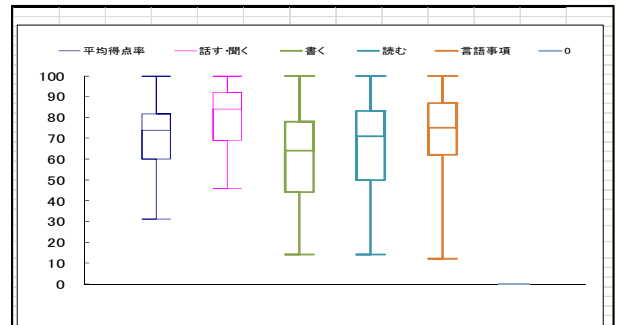
①

県学調 (H29. 10) 【国語】



正答率は県平均を上回っているが、中下位層が膨らんでいる。他教科でも同様の傾向が見られた。

CRT (H29. 12) 【5年生 国語】



	平均得点率	話す・聞く	書く	読む	言語事項
平均	70.2	79.6	61.3	67.0	72.4
中央値	74.0	84.0	64.0	71.0	75.0
N=	82	82	82	82	82
標準偏差	16	14	21	21	18

正答率は全国平均を上回っているが、下位層とその上位との平均点の差が大きく見られた。(算数も同様の傾向である。)

②

2 結果の分析

目標について

「全国と県平均を上回る」は達成
(以下は確認した課題)

- ・中下位層のふくらみの改善 (中下位層の正答率を上げる)
- ・平均の見方に加えた多様な見方による分析
- ・実態を改善するための問題解決的な目標の設定

授業改善

「わかる・できる授業」の意識が向上 (教師の自己評価)
(以下は確認した課題)

- ・中下位層の引き上げを視点にした授業の組み立てや手立て
- ・下位層が授業に参加できる授業づくり
- ・下位層児童の意欲付けと学習内容の定着
- ・用語等の習得と思考の言語化 (小問分析)

③

3 「確かな学び、豊かな学び」実現プランの目標

平成 30 年度に向けた目標設定

- (1) より厚みのある学習集団を形成する。
 - 「中下位層と下位層」の平均正答率を上げる。
- (2) わかる授業の取組を推進する。
 - 質問紙「授業の内容はよく分かりますか」に対する肯定的回答の割合を上げる。
- (3) 思考を言語化できる児童を育てる。
 - 無解答率の割合を下げる。

中下位層・下位層の平均正答率を上げることについては、「その子が持っている力を最大限に伸ばすためにどう関わるべきか」という意識で授業づくりを行う。



4 学校の課題解決に向けた取組（授業改善の取組を中心に）

(1) 授業改善 ～「授業改善10の取組」～

10 項目の 決定	①【CRT 分析と実態把握】 小問分析からの課題把握と四分位分析からの「中下位層と下位層児童」の把握。	②【手立ての洗い出し】 「目標達成のための手立て」という視点で、教職員全員で具体的手立てを考える。	③【手立てを検討】 出し合った手立ての一覧から、授業改善の重点とする10の手立てを決める。
	実践	④【手立ての実践】 取組シートを常に手元において、課題意識をもって授業改善を図る。	⑤【毎月のふり返り】 ふり返りの時間を確保し、個々の成果・課題をシートに書き込みながら進める。

～④⑤⑥を繰り返し、CAPD サイクルを回している個々の取組シート～

<H30 南小 学力向上>
【H30-31 確かな学び 豊かな学び 実現プラン】

A 教諭

ア より厚みのある学習集団を形成する。
イ 「わかる授業」の取組を推進する。
ウ 思考を言語化できる児童を育てる。
エ 無解答率の割合を下げる。

【授業改善10の取組～指導の意図を大切に～】

【つかむ】 Δ *25分以内 課題まで5分、それ以降5分は自分で解決*

- 単元の見通しやゴールを確認する。 Δ *本時の見通しはもてるよ！*
- ねらいに応じた学習課題を設定する。 Δ *しているが、単元の見通しまではX*

【かんがえる】 *手、ついにさっさと、手取り子*

- 自分の考え、理由（根拠）を書く場を設定する。 Δ *書く。*
- アウトプット（話す・書く）の場を積極的に取り入れる。
- 小グループで問題解決をする学び合いを位置付ける。 Δ *グループ*
- キーワード（重要語句）を板書で分かりやすく示す。

【ふりかえる】 Δ *時間の確保 → 発表はできていない。*

- ふり返り活動の充実（時間と質）
- 評価問題で個々の達成状況を確認する。 Δ *補充*

【授業づくり全般】

- 簡潔な指示・発問・説明。
- どの子の反応も受け止める（受容する・聴く）。 Δ *誤答も受け止める。*

4 5 6 7 8-9 10 11 12 1 2-3

4 Δ 5 Δ 6 Δ 7 Δ 8 Δ 9 Δ 10 Δ

<H30 南小 学力向上>
【H30-31 確かな学び 豊かな学び 実現プラン】

B 教諭

ア より厚みのある学習集団を形成する。
イ 「わかる授業」の取組を推進する。
ウ 思考を言語化できる児童を育てる。
エ 無解答率の割合を下げる。

【授業改善10の取組～指導の意図を大切に～】

【つかむ】 *生活も意識 やりたい！*

- 単元の見通しやゴールを確認する。
- ねらいに応じた学習課題を設定する。 *矢張りかと思ってるが、授業のねらい*

【かんがえる】 *その前見通しは必要*

- 自分の考え、理由（根拠）を書く場を設定する。 *ここは理由をちゃんと書かせる*
- アウトプット（話す・書く）の場を積極的に取り入れる。
- 小グループで問題解決をする学び合いを位置付ける。 *何を話し合おうか*
- キーワード（重要語句）を板書で分かりやすく示す。

【ふりかえる】 *行かぬ*

- ふり返り活動の充実（時間と質）
- 評価問題で個々の達成状況を確認する。 *担任もってこさせる → 必然性*

【授業づくり全般】 *この教科書は*

- 簡潔な指示・発問・説明。 *必然性 支援の必要な子にも*
- どの子の反応も受け止める（受容する・聴く）

4 5 6 7 8-9 10 11 12 1 2-3

4 Δ 5 Δ 6 Δ 7 Δ 8 Δ 9 Δ 10 Δ

7-8 視点、おしつけ、おしつけ、おしつけ

4 達成感

8 達成感

10 達成感

ほめる！

職員会議での発表



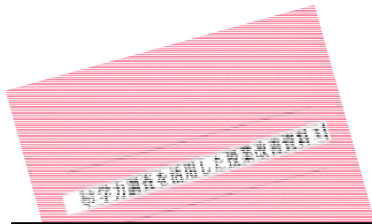
「8 評価問題で個々の達成状況を確認する」の自己評価が、 Δ から Δ になっているのが分かる。

A 教諭は、中下位層を引き上げるための手立てとして評価問題を特に重視し、次時の導入に復習を位置付けて補充する実践を進めている。

B 教諭の学級には、特別な支援や配慮が必要な子どもが数名いる。その子どもたちの学習を保障するためという視点が必要であった。

見通し、簡潔、ICTによる視覚支援等を通して達成感をもたせる実践を進めている。

(2) 授業改善② ～学力調査を活用した授業改善資料ファイルの活用～



全国学調、県学調、CRT の問題をファイルし、一人一人が手元に置いて活用している。一つ一つの問題には、下記のような「問題のねらい」「正答率」「無答率」「かかわる単元」等があり、関連する単元学習の際に活用している。
(関連する単元は、4月の校内研で学年毎に確認)

③ 次の(1)、(2)の問題に答えよう。

(1) 次の数直線の↑のめもりが幾何分数はいくつですか。帯分数で表しましょう。

3-1 ⑧	4A(経年)	関考技①	選択	短答	記述
数直線上のめもりを帯分数で表す方法について理解している					
岩手県	71.9	本校	56.6	県比	78.8
本学習にかかわる関連する単元	P. 下 P78「分数をくわしく調べよう」				

(3) 授業改善③ ～学力調査の結果を踏まえた授業改善の視点～

5 学年算数科学習指導案

た、H29 県学習定着度状況調査 ⑥ (小数倍の報から基準量を求める場面を捉え、比較量と小数倍から基準量を求めることができるかどうかみる。)において、岩手県正答率43.2%に対して、本校43.2%だった。このことから基準量と比較量、小数倍の関係をとらえきれていない状況と考えられる。

これを踏まえた授業改善の視点としては次の3点である。

①「数直線にかく学習を丁寧に扱い、基準量、比較量、小数倍の関係を捉えられる力を高める。」
数量の関係を数直線上に表現し、関係を捉える力を付けるため、数直線を描くことを習慣化させる。また、数直線の便利さ、良さ感じさせるようにする。また、「もとにする量」「くらべられる量」という言葉の問題文の読み取りの場面から確認することで基準量、比較量、小数倍の関係を捉える力を高める。

②「なぜ、そうなるのかを常に問いながら授業を進めることで、説明する機会を増やす。」
「(理由)だから(結論)となる。」という考え方を定着させるため、理由を問う発問を意識的に増やす。

③「筋道をたてて考える力を養うため、見通す段階を丁寧に扱う。」
どの授業でも、見通す段階を丁寧に扱うことで、論証する力、筋道を立てて考える力を養

上記の授業改善資料ファイルを活用し、学習指導案に位置付けている。

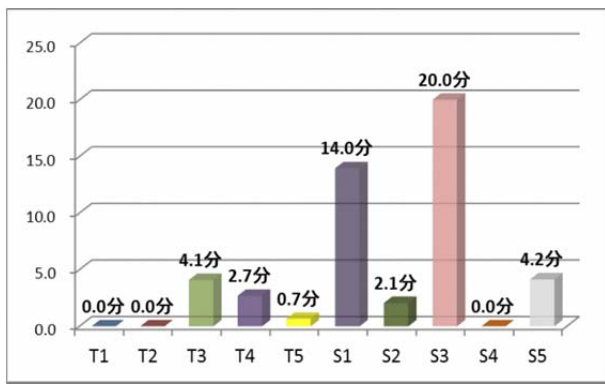
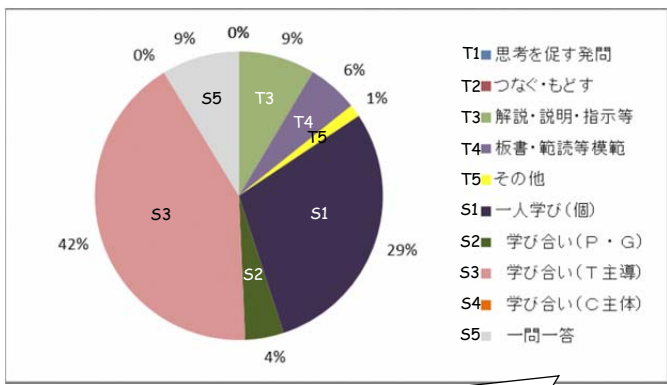
授業者は、誤答分析から、基準量と比較量、小数倍の関係を捉えていない状況を読み取り、「数直線にかく学習活動を丁寧に扱い、基準量、比較量、小数倍の関係を捉える力を高める」等、3つの授業改善の視点をもって単元学習に臨んでいる。

記述の問題に対応する力を高めるため、繰り返し根拠を問いながら、説明の場面を意図的に設定する等、中下位層に配慮した授業を構成した。

(4) 授業改善④ ～ s-t 分析 (量的分析) ～

授業研究会での「質的分析」の補助材料として「量的分析」を取り入れた。授業者と学習者の行動項目を設定し、それを数量化して提示し、授業場面の協議に生かしている。

〈実践例 3 年生「大きい数の計算」 技能をねらいとした時間〉



本授業は、技能に係るポイントを押さえるため、教師と児童の丁寧な対話で構成された授業であった。グラフの一人学びには評価問題も含まれ、技能習得の時間も十分に確保されていた。

ペアの学び合いでは、全体の学び合いではなかなか話せない中下位・下位層の児童が、より意欲的に学ぶ姿が見られた。しかし、2分程度しか時間を確保できなかったため、グループ学習の位置付けについて検討していく必要性を話し合った。

5 諸調査結果から見える結果の考察

(1) より厚みのある学習集団を形成する。

「中下位層と下位層の平均正答率を上げる」について

【中下位(平均)の中上位(平均)に対する正答率の割合(同集団)】

H29 県学調		H30 全国学調			
国語	0.86	国語 A	0.87	国語 B	0.81
算数	0.79	算数 A	0.80	算数 B	0.68

【下位(平均)の中下位(平均)に対する正答率の割合(同集団)】

H29 県学調		H30 全国学調			
国語	0.62	国語 A	0.61	国語 B	0.53
算数	0.53	算数 A 0.63	算数 B 0.51		

【結果】

- ・中下位層と中上位層の点数比に大きな変化は見られない。
- ・下位(平均)の中下位(平均)に対する正答率の割合を見ると、全国学調の算数 A において、その割合が県学調を上回っている。また、算数 B でも、県学調とほぼ同じ割合を維持している。

- 算数において下位層の底上げが図られたことを読み取ることができる。これは、H29 県学調の得点分布から他教科には見られない下位層のちらばりを分析し、中下位層をより意識した授業づくりに取り組んだ成果と考えられる。
- 6年生は、全国学調のB問題の分析後、根拠や求め方を記述する問題に対応するため、岩手県総合教育センターのデータベースにある活用問題を単元後半に位置付けて取り組んでいる。

(2) わかる授業の取組を推進する。

「質問紙『授業の内容はよく分かりますか』に対する肯定的回答の割合を上げる」について

【質問紙の肯定的回答の割合(%) ()は積極肯定】

	H29 県学調		H30 県学調	
	国語	算数	国語	算数
本校	89(53)	91(61)	93(34)	84(51)
県	91(44)	87(51)	90(42)	87(49)

【結果】

- ・県とほぼ同様の割合である。
- ・積極肯定の割合が県を上回っている。
(H30の国語を除く)

- 1学期末の全校児童アンケートの結果においても、肯定的回答は88%であり、全学年で分かる授業づくりが展開されていると言える。
- クロス集計により次の項目について相関関係が見られた。

「算数の授業内容が分かる」と「既習をもとに考える」
 「国語・算数の授業内容が分かる」と「振り返りを行っている」
 「国語・算数の授業内容が分かる」と「ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがある」
 「国語・算数の授業内容が分かる」と「自分にはよいところがある」

校内研で思考力・表現力を育てる仮説として取り組んだ「振り返り活動」と「分かる」という肯定意識との関係性は、考え表現する授業が子どもにとって分かる授業につながると捉えることができる。また、やり遂げる等の非認知能力との相関からは、授業改善にとどまらず特別活動等の充実が重要であると考えられる。

(3) 思考を言語化できる児童を育てる。

「無解答率の割合を下げる」について

【全国学調の記述式の無解答率(%)B問題】 【県学調の記述式の無解答率(%)】

	H29		H30	
	国語	算数	国語	算数
本校	2.0	4.4	2.9	6.8
県	5.7	8.0	4.4	9.8

	H29	H30
	算数	算数
本校	4.2	1.7
県	4.3	4.0

【結果】

- ・無解答率は県と比較して低い。
- ・県学調の記述問題において、無解答が減少している。
- * 県学調の国語については、時間配分による無解答が目立ったため検証材料から除いた。

全国学調の算数Aは、H29・H30ともに無解答率0%である。(県の無解答率：H29(2.8%) H30(3.4%))

思考の言語化が本校の課題だったので、授業では説明することを重視し、自分の考えをノートに表現することや根拠を説明することを継続してきた成果と考えられる。今年度県学調の国語では、文章の読み取りにおいて、「言葉を抜き出すこと」、「要約すること」で時間を要し、最後まで解答できなかった児童が多かったので、多様な言語活動に意図的に取り入れていく必要がある。